

青年期の登校回避感情について
— 対人関係及びパーソナリティの視点から —

戸田 雅子

【問題と目的】

人間の生涯発達段階において青年期に位置する高校生は、児童期と成人期の間位置し、疾風怒濤の時代といわれるように自立と依存のアンビバレントな状態であり、過敏性が高く、身体的にも性的成熟の時期であることなど、心の揺れが最も激しい激変期にある。そのため、友人関係においてはお互いの考えや悩みを語り、共感しあうことで緊張や不安を和らげようという精神的つながりが友人関係の基準になってくる。友人関係は、この時期の青年を支える重要なものであるが、近年、社会そのものや価値観の変容に伴い対人能力の低下が指摘されている。そのような自他が傷つくことに過敏になる心性をもつ青年が、自己の中の葛藤を抱えながら、それを他人と共有することなく、友人とはお互い傷つかないような距離をとり、学校という集団の中で生活を送っていくことは、精神的に負担の大きいことだろう。このような青年は学校に対しても、ネガティブな感情を抱きやすいのではないだろうか。本研究では、青年期の登校回避感情と対人関係及びパーソナリティとの関連について検討することを目的とする。仮説として考えられることは以下の通りである。友人関係において群れているもののその付き合いは表面的で、相手のプライバシーには踏み込まないなどの特徴を持つ者は、傷つくことへの不安やそれを回避しようとするふれあい恐怖が高くなり、登校回避感情が高まると考えられる。研究Ⅰでは高校生を対象に現代青年的な友人関係の持ち方がふれあい恐怖を高め、対人回避的になり、学校へのネガティブな感情を高めるというモデルに基づいた検討を行い、パーソナリティについても考慮する。さらに臨床群と非臨床群の比較を行うために、研究Ⅱにおいて、登校回避感情と対人恐怖心性の関連について不登校群と高校群の比較検討を行う。

【研究Ⅰ】

方法 愛知県内の高校2校の1年生から3年生までの455名を対象とした質問紙調査を行った。調査実施時期は2003年10月～11月であり、質問紙の配布、回収は担任教師に依頼され、各クラスで一斉施行であった。調査に用いられた尺度は以下の4尺度である。

- ①登校回避感情尺度(藤垣, 1996)
- ②友人関係尺度(岡田, 1995)
- ③ふれあい恐怖尺度(岡田, 1993)
- ④Big

Five尺度(和田, 1996)

結果 まず、各尺度の検討を行った。各尺度について、作成者と同様の因子構造であるかどうかを確認するために、因子分析を行った。その結果、4つの尺度全てについて作成者と同様の因子構造が見られた。また、信頼性について検討するために各尺度、及び下位尺度についてα係数を算出したところ、いずれの尺度、下位尺度についても十分な信頼性が示された。さらに、性差について検討し、各尺度、及び下位因子の男女差についてt検定を行った。その結果、「ふれあい恐怖尺度」においては有意に男性のふれあい恐怖が高かった。「Big Five尺度」では、「外向性」因子では有意に女性の方が高く、「調和性」因子では男性の方が有意に高かった。「ふれあい恐怖尺度」の下位因子である「関係調整不全」因子と「対人退却」因子では有意に男性が高かった。次に登校回避感情の要因について検討するためにパス解析を行った。Figure 1に全体のパス図を示す。また、Big Five尺度と登校回避感情について相関を調べた。

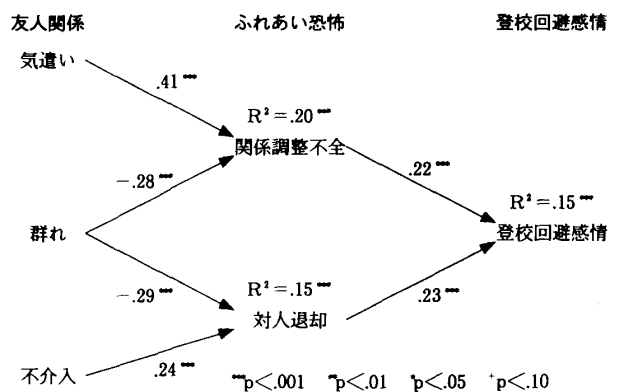


Figure 1 全体におけるパス図

考察 先行研究においては、女性より男性の方が学校に対するネガティブな感情が強いという報告が多いが、本研究においてそのような結果は得られなかった。先行研究では対象者が小・中学生であったのに対して、本研究の対象者は高校生であったことが理由と考えられ、年齢の発達とともに登校回避感情の男女差が見られなくなるその要因についての検討が必要であろう。また、登校回避感情を高める要因を検討した結果、友人関係において「気遣い」をする者は、他人とうまく距離が取れないといったふれあい恐怖の「関係調整不全」が高くなり、そ

の結果登校回避感情が高まること、また、友人関係において「不介入」傾向である者は、ふれあい恐怖の「対人退却」が高く、それが登校回避感情を高める要因となることが示された。堀・松井(1981)は、「クールな交友」をする群が、強い精神的な疲労感を示すと指摘している。相手にあまり踏みいらぬように心理的距離を置いた付き合い方は、相手が傷つかないように、自分が相手によって傷つけられることの不安に起因し、長沼・落合(1988)がいうように青年は友人との関係を作りたいと望むが慎重であるというアンビバレントな感情を有しているため、精神的疲労を高め、学校に対してもネガティブな感情を抱くようになることができるであろう。一方、友人関係において「群れ」る者は、ふれあい恐怖の「関係調整不全」、「対人退却」のどちらにも負の影響を与えた。この結果は、群れ志向群は適応的特徴を示すこと(岡田,1996)と一致しており、友人と群れることは、ふれあい恐怖につながらないことが示唆された。これらの友人関係の「群れ」、「気遣い」、「不介入」という3つの特徴は、直接的な登校回避感情への影響は見られず、友人関係のあり方がふれあい恐怖に影響を与え、ふれあい恐怖の高い者は、登校回避感情が高いことが示された。友人関係がたとえ表面的で、冗談を言ったり明るい雰囲気になるように気を使ったりするといった躁的防衛であったとしても、友人と群れることは、登校回避感情につながるふれあい恐怖を低減させ、適応的であるといえる。また、逆に友人との関係が心理的距離の遠い者は、自分が傷つくことへの不安が高く、それを回避しようと対人回避的になる等ふれあい恐怖心性を高め、ひいては登校回避感情を高めるといえる。男女別に見てみると、男性と女性では登校回避感情に及ぼす影響のあり方が異なった。女性においては、先に述べた調査対象者全体の構造と同様であった。一方、男性では、友人関係において取り残されないように気をつけたり、互いに傷つけないように気をつかったりするなど「気遣い」をする者は、ふれあい恐怖の「関係調整不全」が高くなるが、そのことは登校回避感情には結びつかないという点で女性とは異なっていた。男性は他者への依存を断ち切り、自立した個人として存在することを志向するのに対して、女性では他者と相互依存しつつ他者との間に協調的な関係を築くことを志向するということは先行研究において多く報告されている。他人に依存せず自立を志向する男性にとって、他人と雑談することの苦しさ、相手と適切な関係がとれないのではないかという懸念は、学校という集団生活の中での満足度に影響を与えず、学校に対してネガティブな感情を抱かせる大きな原因にはならないといえる。パーソナリティと登校回避感情については、

「外向性」、「誠実性」、「調和性」と負の相関、「情緒不安定性」と正の相関が見られた。登校回避感情の高い者は、「情緒不安定性」が高く、「外向性」が低いことは、先行研究と一致している。登校回避感情の高い者のパーソナリティの特徴としては、不安が高く、内向的、完全主義、協調性に欠けるといふ従来から指摘されている傾向と一致する結果がBig Five尺度を用いて得られた。

【研究Ⅱ】

方法 調査対象者は、愛知県内の高校1年生から3年生496名と名古屋大学附属病院を受診した患者のうち、不登校を主訴としたケース54名である。前者を高校群、後者を不登校群とした。調査実施時期は高校群では1999年6月、臨床群では2000年から2001年である。調査に用いた尺度は以下の通りである。①登校回避感情尺度(藤垣,1996)②対人恐怖心性尺度(堀井・小川,1997)による対人恐怖尺度の下位尺度の中から、「自分や他人が気になる悩み」、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」の3下位尺度を用いた。

結果 高校群、臨床群それぞれについて相関分析を行ったところ、高校群では登校回避感情と対人恐怖心性全体の得点に正の相関、臨床群ではやや強い正の相関が見られた。対人恐怖心性の3つの下位尺度については、「自分や他人が気になる悩み」では、高校群で正の相関、臨床群で強い正の相関、「集団に溶け込めない悩み」では、高校群で正の相関、臨床群で強い正の相関、「社会的場面で当惑する悩み」では、高校群で弱い正の相関、臨床群で正の相関があった。次に各尺度について群間での比較検討するためにも検定を行った。登校回避感情では、臨床群は高校群より有意に高かった。また、対人恐怖心性においても、臨床群は高校群より有意に高かった。対人恐怖心性の下位尺度について見てみると、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」で有意に臨床群が高校群より高かった。

考察 登校回避感情は、対人恐怖心性、およびその3つの下位因子それぞれと有意な相関があった。学校に対するネガティブな感情の強い者ほど、対人的緊張が高く、それは高校群、不登校群ともに同様であった。さらに、不登校児のみだけでなく登校しながらも学校に対するネガティブな感情を抱いている不登校潜在予備群についても、やや弱い登校回避感情と対人恐怖心性との間には相関があり、登校回避感情の高い者は対人恐怖心性が高く、学校での集団生活は苦痛なものであると予測できる。高校群と臨床群の比較検討を行った結果、登校回避感情、対人恐怖心性のどちらにおいても臨床群の者は、集団に対する不適合感が強く、集団での対人場面にうま

青年期の登校回避感情について

く溶け込んで自由に振舞えない、また人前で振舞う時にあがりや困惑といった不安傾向が強いことが伺えた。登校回避感情尺度は学校に行きながらも学校に対してネガティブな感情を抱いている程度を測定しているが、不登校である者の得点が有意に高くなっていることより、高校群における登校回避感情の高い不登校潜在予備群が不登校につながる可能性が示唆された。

【総合考察】

本研究では、社会的な問題である不登校の要因の一つとして、学校に対して回避的な感情が存在すると考え、

この「学校に対するネガティブな感情や登校を回避したい気持ち」である「登校回避感情」が生起する要因を明らかにすることを目的とし、いくつかの知見を得ることができた。しかし一方で、ソーシャルサポートなど不登校を抑制する要因の影響やその他の誘引にまで言及することはできず、今後はこのほかにも様々な他の要因を交えて登校回避感情の生起のメカニズムについて検討する必要がある。また、高い登校回避感情を有していながらも登校している要因については検討ができておらず、今後の研究の成果が待たれるところである。